

ニッポン全国元気団紹介 山口県連盟 下松第1団

ストーリー仕立てのプログラムで楽しく生きる力を学ぶ

下松市は山口県東南部に位置する市。全国すみよさランキング2021年で10位に選ばれている市であり、山口県では2019年～2022年まで3年連続で「住みこち」ランキング1位。また「住みたい街」や「街の幸福度」でも常に上位に入っている街である。



瀬戸内海に面する臨海工場地域で、中国電力下松発電所、東洋鋼板、日立製作所などが立ち並ぶ。山口県内の人口は減少しているものの、下松市内の人口は増加傾向にある。そんな下松市を拠点に活動する下松第1団は、昭和26年の3月に設立された歴史のある団。自然豊かな環境(下松市温見野营地)で団家族パーティーを行ったり、ユニセフ街頭募金活動、近隣の自治会のお祭りやイベントへ参加するなど地域に根差した活動をしている。

■指導者の熱意が保護者へ伝わりスカウト数増員

ボーイスカウトの指導者になるためには最低限「講習会」を受けねばならないが、下松第1団はビーバー、カブ、ボーイ、ベンチャーそれぞれの隊長が指導者としては最高の「上級訓練」の修了者ばかり。様々な職業の方が指導者になる中で、隊長自身が自己研鑽のために時間を作り、子ども達のために頑張るといふ想いから訓練を受けている。



こうした隊長たちの熱意や一生懸命さが子ども達に伝わり、保護者の方へ伝わり、それがロコミにも広がり、スカウト増員に繋がっているのではないかと考えられる。安定してスカウト数が増えている1つの要因だと考えられる。

■ストーリー仕立てのプログラム

下松第1団の大きな特色として、隊指導者が作るプログラムが子ども達をワクワクさせたり、興味や冒険心をくすぐる内容になっている。ボーイスカウトは野外活動の中で自分の技能を上げたり、協調性を養うことも目的となっているが、そのためには子ども達にまずは興味を持ってボーイスカウト活動を持続してもらうことが大切。という考えを元に、毎回、指導者が工夫や趣向を凝らしたプログラムを用意している。



例えば、「ラムネ」をスーパーフードと名付け体力回復の秘薬としたり、「幻の〇〇」、「伝説の〇〇」、「魔法の〇〇」など、小さな出来事ひとつにも子ども達がワクワクするようなネーミングがついている。大人でもワクワクするような活動内容は、下松第1団のフェイスブックを是非見て頂きたい。

取材当日は、コロナ後中止していた久しぶりのユニセフ募金活動の日だった。募金活動の前にカブ、ビーバーの子ども達には世界の子どもの現状を絵本を使いながら説明。子ども達それぞれに自分達は何が出来るのかを考えさせていた。また、実演形式で募金をお願いする際の悪い例、良い例を紹介してとても分かりやすく子ども達も楽しく学んでいた。



■SNSを使って写真や動画を発信

ボーイスカウトが実際に行っている活動は一般的にあまり知られてないため、下松第1団では2015年からフェイスブックへの投稿を開始。各隊長や保護者が撮影した写真・動画を合わせ投稿している。フェイスブックのアカウントはボーイスカウト日本連盟のホームページにも登録しており、そこから問い合わせや体験入隊に繋がることも少なくないという。

SNSの更新は大変だが、各隊長がそれぞれ分担して投稿しているので更新頻度は高い。現在は地区トレーニングチームと協同して「火起こし」「手旗」などの方法を動画で撮りユーチューブでの発信も考えているとのこと。動画はテキストや静止画よりも多くの情報を伝えることができるので、こういった発信は下松第1団だけでなくボーイスカウト全体のスカウト数獲得になるのではと感じた。

■コロナ禍での活動

「活動を止めたらダメだ」という想いから、コロナ前と変わらない頻度で活動している。ただし活動場所はインターネット上となり、複数人とオンライン会議ができるGoogle Meet(グーグルミーティング)を活用。パソコンの画面越しに絵を描いたり、歌を歌ったり、今後やりたいことについて話し合ったりしている。物作りなどの必要な教材は、隊長が準備し事前に各家庭に配布して回ったそうだ。活動をしないという選択肢もある中で、子ども達の興味を持続してもらうため、新しい発見のため、1ヶ月に1~2度は開催している。

プログラムに個性を持たせたり、SNSを用いて外部へ発信したり、保護者の方へも指導者的なお手伝いをいただいたり、団員が増えている要因は複数あるが、最も特筆すべきは「指導者たちの熱意」だろう。子ども達に楽しんで貰いたい、笑顔になってもらいたい、その思いを指導者全員が共有し、ぶれずにひとつの目的を持って進んでいるという印象をうけた。

